

地域支援心理研究センター公開シンポジウム（第6回）

基調講演「二次障害としての非行」

－ 診断することの意味－

講師：京都少年鑑別所・精神科医
定本 ゆきこ

皆さん、こんにちは。少年鑑別所の定本です。

知っている人は知っているのですが、私ちょっと、ADHD的なことがあります、今回の講演を随分前から、ご依頼いただけたにもかかわらず、1時間、開始時間を間違えて準備してきまして、開始の1分前に到着しました。ということで、司会の方々と、先生を含めて、皆さんを困らせてしまったこと、申しわけありません。

私は、少年鑑別所というところで、非行少年の鑑別をする仕事を精神科医として主な業務にしてきました。

鑑別というのは、犯罪行為を犯した子ども、14歳から20歳までの子どもが、どうしてこういうことをしたのかということ調べることでございます。そのために、その子の育ってきた環境を調べたり、それから今まで起こってきたこと、その家庭や学校や地域の状況、そして、資質。そういうものを調べた上で、総合的に、その子が非行に至った理由の鑑別をおこなうという感じです。

いつも私が鑑別するとき、三つの視点を大事にしているのです。子どもは周囲の環境の影響を受けやすい。未熟で発達段階の途上にありますから、依存的な段階です。大人以上に周囲の環境の影響をすごく受けています。だから、子どもの行動に関しては、必ず、その子どもだけを見ていてもわからない。周囲の環境がどうだということを見ないと、わか

らないです。

それから、非行少年といっても、昨日、今日、急に非行少年になった子は一人もいません。もう、私の経験では、よくわかるのです。幼児期、学童期、いろんなことが積み重なった時の流れの中でこそ、今です。いきなり非行といっても、それは必ず、その前にサインを子どもたちが出していたのを、周囲の大人が気付かなかった。あるいは、気付いていても、どうしようもなかったということがあります。

それから、子どもそのものの資質をしっかり見ないといけない。同じ虐待を受けた環境に育ったとしても、思春期に非行に至る子と至らない子がいるのです。

こういうふうには、だいたい人は思春期、青年期、いろいろなことを起こすのです。幼児期、学童期に起こしても、それは、そんな大したことではないとか、周りの大人が困るということはないわけです。

やはり、非常に青年期にいろいろなことが起こるのだけれども、必ず、それまでに至る理由というか、必然性というものがあると感じています。

どうして思春期にいろいろなことが起こるか。思春期の心性ということをお話しします。まず、第二性徴から始まります。これはホルモンの問題です。心身の発育や発達は、非常にアンバランスになります。そういうときには、思春期は「自分」というのが一番の

関心事です。そして自己像ということが、自分がどういう存在なのか、周りからどう見られているのか、自分は何のために生まれてきて、どんな役割で社会に参加すればいいのかみたいなことが非常に問題になります。

心は敏感だし、極端だし、不安だし、自分は人にどう見られているか、心配ですから、ちょっとした視線やちょっとした言葉だけで、極端に喜んだり、悲しんだり、絶望したり、有頂天になったり。そして大人が思っている以上に、子どもたちは不安を抱えています。だって、こういう不安定な時期にあって、進路とか、友だち関係とか、こういう難しい問題にいつも直面しているわけなのです。だから、この時期の子どもたちは、非常に、身近な大人に対して依存的になっています。第二の乳児期と言われるほどに、思春期は依存的になります。

一方で、思考力とか判断力が付いているので、自己主張がある。そして大人に対して反発する。だから、この「依存」と「反発」というのが両方、子どもにある。それはやはり、大きな非行のメカニズムだと思うのです。それまでの生育歴のなかで積み残している矛盾とか、置き去りにしてきた問題といったものが、思春期に激しいエネルギーを持って噴出する。それが非行だというふうに、私は感じてきました。

この一つの非行なのです。いろんな出方があります。思春期というのは、誰しも通る道なのですが、その子の資質とか能力とか、周囲との関係とか葛藤も…、ということによって、出方が全然違うのです。

子どもを重層的に捉える。これも大切だと私は思っていたのですが、先ほど挙げたのは、発達障害があろうがなかろうが、思春期の問題です。次は発達障害があるかどうかをきちっと見るということです。こういうふうなことがあって、子どもの人となり、個性は一人一人違うのです。思春期の問題の出し方に

も違いがあります。

ベースはベース。どんな子でも生物的なベースがある。そのように発達の過程があって、心理的な問題では、情緒や行動の問題。そして神経症障害みたいなものが、症状が・伴うということです、ここで。ここで、専門家にかかったりするきっかけになったりすると。それをすべておおうものとして社会・環境の要因があります。そういうことをきちっと、一人の子どもについて把握してこそ、一人の子どもの理解ができたということだと思うのです。

発達に関してはもちろん、生物学的や中枢神経系、基本的障害がベースにあるというのが発達障害なのですが、でもやはり、機能的障害であって器質的なものじゃないですから、社会・環境が、常にその子の生活している環境が、その子の発達に促進的な環境であれば、発達は絶えず促進される。でも、環境が発達に阻害的な環境だった場合に、発達は停滞していくということが言えるのだと思います。

私は、もう平成3年から非行少年を見ているのですが、おおざっぱに言って、非行少年って、どんなのだと聞かれたときに、悪いことをして入っているのです。だから、非行少年は悪い子たちなんだと思うのですが、実は案外そうでもないのです。服を脱いで、普通の体操服みたいなのに着替えて入ってきて、子どもは、案外、普通の子なのです。たいがい、かわいい普通の子なのです。

ただ、生きる不器用な子たちが多いのです。そしてうまくやれないのです、社会の中で。ドジな感じなのです。それから先のことを考えずに思いつきですぐ行動してしまう。ちょっと先のことを考えれば、10年も50年も先じゃなくていいのです。1分か2分か、せいぜい3分先のことを考えたら、こんなことをしないのにといいうふうな。

それから、周囲のことがちゃんと見えてい

ない。自分の置かれている状況がつかめていない。それから、社会でうまく世渡りというものができないんじゃないか。生きにくさを抱えているんじゃないか。そういう感じの印象を感じてきました。どうなんだと言われると。

でも、だからといって、まったく社会に適応できていないかということではないのです。一応、普通の世界に生きているのです。だから、特別な援助や配慮を受けてきたわけじゃないのです。

私はそういうところに、資質的な脆弱さ、ちょっとした脆弱さというのを感じていたのです。必ずしも環境的な問題だけではないと感じました。虐待を受けている子は本当に多いのです、だから養護施設に措置されますが、適応できずに無断外泊をしたり、それから親族の他のところに移しても同じことを繰り返す。また家出を繰り返す。無断外泊を繰り返す。親族のもとにいて、また、葛藤して、けんかして、反発して、こういうことを繰り返してしまふ。というふうな子がいて、環境が改善されれば、それで解決になるんじゃない。発達の問題も抱えているというふうに思われる子がおりましたので、それはやはり、ちょっとした部分。大きな目に見える範囲じゃないのです。福祉的サービスや教育的配慮から抜け落ちたところでいいのかなというふうに。だんだんと私は、平成9年ぐらいから、こういう診断をするようになったのです。

知的障害の、たいがいは判定されていないのですが、計ってみたら、60代とか70代の前半とかということもあるのですが、知的障害のレベルは軽度なのです。なので、軽度とか、境界知能の80ぐらいのところが多分非行少年全体で多い。いずれも言わば、軽度なのです。だから、グレイゾーンの、診断はされるかされないかわからないぐらいのところが多く、ほとんどは未診断です。

なので、相応の配慮や教育を受けていない。

やはり思春期に至って多くの修飾をまわってしまう。もともとの障害特性ではなくて、二次障害です。そういう印象を持ったのです。それが一つ。

特に発達障害だけで非行化するわけじゃないということが、必ず言えます。やはり、先ほど言いましたように、不器用で生きにくさを抱えている子どもなのです。だから、通常よりも、ちょっとだけ丁寧に、すごくじゃなくて、ちょっと丁寧に保護されながら、この世界の生き方を学んでいくという過程が必要なんだろうなと思うのです。

それが、守られなかった。むしろ、誤解を受けたり、無理解の環境のなかで、多くの傷を受けてしまった。それが思春期まで問題が持ち越されて、積み残されて、引きずられて、どこか二次障害をとるというふうになるのです。

社会の人間関係の取り方もうまくないという気はします。現実適応力とか、行動統制力とか、そういうものを向上させるための訓練という感じなのです、矯正教育は。

矯正教育というのは、少年院でやる教育です。悪いことをした子に、悪いことをしてはいけないよという教育じゃないのです。不器用で生きにくい子どもたちに適応力を付け、行動統制力、ちゃんと自分の衝動をコントロールできるというふうな、そして周囲とうまく人間関係が持てるというふうになるための訓練の場という気はします。

そこで、発達障害のことが診断はされないまでも、そういう傾向を持った子が少なくないということを想定した上で、認知行動療法です。そういうことが進められたらいいなと思います。

今度は発達障害と二次障害というものがあります。誰にとっても、成長、発達していく過程があります。それは、発達障害かまだわからないけれども、子ども側の資質的な弱さにちょっと気付く。その上で、育つ子どもが乳幼児期、学童期、思春期になっていったと

きの周囲や経過を、想像しながら鑑別をよくします。

時期ごと、ライフサイクルごと。この子は乳幼児期のこの段階で、あるいは学童期のこの段階で、その大きな課題につまずいたんじゃないかなと思うことがあります。

すべての子どもが発達障害があろうがなかろうが、日々、発達しています。しだいに、社会的存在としてのスキルや在り方、社会的存在として、人間として、周囲の人々と人間関係を持って、そういう社会的なスキルや在り方を身に付けていきます。

みんな発達していくのだけれども、獲得していくのだけれども、こういうふうに影響を与えやすいファクターとして発達障害を理解できるのではないかなと思ってきたのです。

先ほどと同じですけれども、誰しも、発達障害があろうがなかろうが、乳児期、幼児期、学童期、思春期、青年期、成人期、老年期というふうなライフサイクルを取りながら、やっていきます。

ライフサイクルごとに、乳児期には、だいたいお母さんとの基本的な、密接な二者関係。要するに、愛着関係を経験することで、社会に対する信頼とか、そういうものを獲得したい。

幼児期には、いわゆる第一次反抗期がありますけれども、自律性ができてきて、それで肯定的な自己像を形成し、自信を持っていけるか、あるいはしかられたり、自信を持てず恥や疑惑を持つ。

小学校になりましたら、初めての集団生活のなかで、課題に出会います。学習課題とか運動会などの行事とか役割活動とか、こういう課題に取り組むことで、心身が発育していきます。ここで肯定的な声かけをされて、自信を持って積極的に、生産的になれる子と、失敗してしかられて私は駄目だとか、私は悪い子なんだ、思ってしまうかという大事な時期ですね、学童期といえますのは。

思春期、青年期になったときに、私って何なんだ、自分はどうやって生きていったらいいの、そういう同一性を獲得する課題があります。それが獲得できないと、自分がいたってしょうがないとか、自分は何もやってもあかんのか、どうやって生きていったらいいのかわからないという同一性拡散の状態になってしまう危険があります。

こういうふうなことを、誰しも悟っていくのです。そのなかで、こういったものを幼児期、学童期、ちょっとずつ獲得していきながら、成長していったらいいなと思うのです。

少しでも早い時期です。こういう多動な、衝動的な傾向があるなと思ったら、常に、日々、そういうことをコントロールできるような、例えばちょっとゆっくり、話をして、ヒントを出して、それから、ちょっと注意散漫なところがあると思ったら、注意喚起をするとか、それからすっきりした整理整頓された部屋で、余計なものがないところで勉強すると。

それから、こういうふうな問題があるとしたら、やはり、ちょっとこの子は対人関係に気を付けようというわけです。一つ一つ、先生がちょっと注意して、ちゃんとお話を聞いてね。こだわりということは、当然、あるのですが、それを良いこだわりに変えていくのです。こう、悪性のこだわりというか、良くないこだわりというのがよくないわけで、1個でも、ちょっとずつコントロールに気を付けるということは大事です。そういうふうな考えています。

発達障害といった場合、特性だけではないです。二次障害が生まれてしまうなというふうな、やはり周囲との関わりというか、周囲との関係性の問題が関係して深まってくると思います。

やはり、人はライフサイクルのときどきに、周囲の身近な人との関係のなかで獲得したり、応えていくものが必ずありますので、そうい

うときに、幼児期だと、ちょっとした障害特性があるということは、育てにくい子であったり、ちょっとわかりにくいことがある。ということで、親側に育児負担とか育児不安となる。

だけれども、軽度なのです。誰から見てもわかるような障害ではないのです。だから、そんなに見えないということで、やればできるはずなのに、何でこうやってできないのという感じで、不安が高まったりします。

そうすると、どうしても虐待とか、そこまですぐでいなくても、不適切な養育ということになりやすいのです。というのは、そういうことで親の育児負担や不安の高さ、そして孤立といったものが、虐待に至りやすい、親側のファクターなのです。

だから、もちろん虐待や不適切な養育、子どもには何の罪のないことなのですけれども、どうしても、そういうことを招きやすいということが、やはり現実としてあると思います。

だからこそ、早期診断が大切。乳幼児期にきちっとした見立てをして、早期診断すること。そして、早期療育をすると、ものすごく有効なのです。

就学前母子通所施設に月1回行っていたときに、ああ、幼児期には、こんな状態なんだな、軽い発達障害を持っている子どもは、こういったことをして、親御さんはこういうことに不安を感じたりするんだなということを目の当たりにしました。

それから、教育委員会の相談事業の中で、学童期の小中学校の子どもたちを見せてもらって、ああ、学校ではこういうことが問題なんだな。それからまた、もう一つおまけに言えば、障害者職業センターで就労につまづいている成人の方々、それから精神科臨床のなかで、うつや何かの症状を持っている人たちを見て、ああ、思春期を乗り越えていく難しさって、こういうことなんだなというふうなことを理解する機会を頂きました。それで、

その非行少年の理解がやっとできたのかなと思っています。

次に学童期です。その本人の特性というよりも、主に集団とか、社会生活での不適応ということが目立ってきます。

やはり、他の子と同じように行動することができなかつたり、先生の指示に従わない。これはご存じのように、ちょっとした言葉の、あっち、行きましょうとか、こうなさいという指示がわからない。曖昧な指示がわからないわけです。視覚的な支援があつたり、ちゃんと1から10まで、しっかり指示してもらったらわかるんだけど、察したりすることができないものだから、従わないと思われたり、それからだんだんに学童期ぐらいになりますと、幼児期の、人に関心がない時期から、今度は、人に関心を持ち始めるのです、必ず。3、4年とか、5、6年ぐらいになると、友だちに関心を持ち始めます。やはり、特性があつても、そのくらいにちょっとずつ社会性も発達していきますから、欲しいとほとんどの子が思うものなのです。僕も友達が欲しい。でも、この時点では、周りの定型発達の子どもたちというのは、ものすごく巧みなコミュニケーション能力を持っていて、ものすごく微妙なコミュニケーションがなされているわけです。

そのなかで、どうやって友だちをつくっていくのかわからないのです。孤立しやすい。それからいろんな身勝手に見える、身勝手ではないのですけれども、行動に出てしまう。それからちょっとしたことでこだわったりパニックがあつたりという状態なので、クラスでいじめとか、それから先生方の無理解、理解がなかった場合、指導したりすると、事態が一層悪化して、自分は濡れ衣を着せられたとか、みんなの前で集中砲火を受けたという気持ちが、後々まで残りトラウマというか、そういうものになってしまう場合もあるわけです。

だから学校生活のなかで、深い傷を負っているのです。やはり、特に成長期です。特性があるんだ。特性があるから、こういうことをしているんだという理解を先生が持って、孤立しないように、集団をきちっと、先生が集団経営をやっていくことで、こういうことはおこなわないということをして、いい思いを持って、学校生活を送り出してもらおうと、成長したときに、青年期、成人期、楽になります。

ADHDの兆候がある場合。二次障害として、やはり思春期、学力不振です。どうしても注意散漫ですから、IQは高いのに、学力が低く、低学歴。そうすると、就労がなかなか難しい。所得が少ない。特に不景気ですから、首を切られてしまうのです、現場で。しかられ続けていくことで、大人への不信や反抗。ずっとしかられ続けていますから、自分なんか、いいところはない。自己像がだんだん、だんだん低くなる。

そうすると、元々明るい人が多いのですが、自然にだんだんと暗くなるのです。抑うつとか無気力になって、何をしても面白くない。もともと元気な子なのですが、思春期でもやることがない、面白くない。

そういうことで、行為障害というところからです。こういうところから関連が出てきている場合もありますし、それから、こういうところらへんから精神科的問題。結構、ADHDの人、子どものときは元気で活発的で明るいのですが、だんだん大人になるにつれ、うつが案外多いのです。気分症が多いです。

それから人格形成でいうと、反社会性人格障害とか、絶えず、要は、うつと関連があります。躁うつ。いつもが元気で、結構、躁状態みたいところがあるので、二極性の、双極性の印象なんかに見える場合がありますし、衝動的で、対人関係が不安定みたいなことが重なると、うつみたいになってしまうことがあります。

そういうふうにならないで育っているお子さんも、ADHDでもいっぱいいるのです。ADHDの傾向があつて、公務員としてとか、先生としてとか、医者としてとか、仕事をしている人はいっぱいあります。

そういうふうには、環境により、良好な人間関係を持った人がいっぱいいるなかで、やはり非行とか、精神科の大きな問題を持ってしまうADHDもあるわけです。なるべく、二次障害が出ないようにすることがADHDの支援のポイントになります。

どういうポイントがあるか。そのとき、その場で注意する。やはり、よくないことをしたら、それを変えていかないといけないのです。放っておいたらいけない。でも、そのときの注意の仕方は、こうなります。あっさり具体的な注意をする。抽象的なことは効果がありません。効果がないどころか、何度も注意しても同じ失敗をするので、どうしても先生は、何度も注意していると逆に、だんだんとお説教の時間が長くなるものなのです。子どもに聞いたら、2時間説教をされた。2時間、何をしゃべられるんだろうかと思うのですけれども。

何をしゃべるかという、やはり抽象的な話になってしまうのです。良い人間になるとか、こういう不景気のなかで生きていくとかという話になると、自分が何をしたらいいのかわからないのです。そうすると、この先生の説教だけは、うけたくないです。そうすると、嘘をついたり、言い逃れもするでしょう。余計に、行動が悪くなる。

次、褒めることは大事なのです。ADHDの子は、今まであまり褒められたことがない。家でも学校でも、いつもしかられ、いつも注意されてきていますから、今まで褒められたことが1回もないという子が結構います。だからこそ、積極的にいいところを見つけて褒めてあげてください。ADHDの子どもは、褒められると、おだてに乗りやすいのです。

気がいいから。

どんな長所があるかという、だいたい、その子はよく動きます。動くのが仕事なので、運動がよくできます。だから、走りが速いとか、木登りがうまいとか、そういうところが案外あります。

それともう一つは、よく共通して思うのは、優しいのです。優しい。非行少年だから、いじわるかというのと違うのです。だいたいの子が優しい。誰に優しいかという、おじいさん、おばあさん、お年寄りに優しい。それから、小さい子どもに優しい。あと、気が好くて素直です。好きな先生に頼まれたら、すぐ何でもやるのです。嫌いな先生のことは嫌いで。そんなことで、そういう素直で優しいということも、褒めてあげるといいですね。

それから、わかりやすい行動枠。わかりにくいことを言っちゃ駄目なのです。具体的に、達成可能な目標設定。絶対に、この子の能力ではできないだろうということは宿題に出してはいけません。ちょっと頑張ったら、到達できるようぐらいの目標設定、課題を設定する。それを必ずやらせる。できたら褒める。そうすると、必ず力が付きます。

二次障害のメインはやはり、家庭での理解と保護の程度。養育熱心もいいのですが、間違った理解の上での対応です。それから、放任もだめです。学校で正しい理解の上で、発達促進的な教育環境が、というところになります。本当、そうなのです。こういうことをすごく思います。

日々の発達です。これはやはり持って生まれた資質と子ども巡る生活環境、家庭も学校も、そうです。地域、社会。この相互作用で、人格が形成されていくし、発達が形成されていくということです。

ループ。資質と環境の相互的で、循環的な営みの中で成り立っていくもの。一方的じゃないし、直線的でもないと思っています。相互的、循環的。やはり、「親があつての子

も、子どもあつての親」ということを学びます。だから、学校では「先生あつての子ども、子どもあつての先生」。どちらか一方の問題として捉えるのは、やはり本質的ではない。全体的に何が起きているか。子どもたちに何が起きているか。親御さんたちに何が起きているかです。この循環をループと思うのですが、望ましい循環とはどんなのかという、いろいろあるのですが、何か見つけて周囲が肯定的な評価を、その子に与える。そして好意的な態度。先生たちは、あなたが好きだよという態度。好きだよという態度を先生に取られている子どもは幸せですね。嫌いだよという態度を取られている子どもに比べると、幸せだと思うのです。親ももちろんそうです。

良好な自己評価にもつながりますし、自己尊重感がだんだん大きくなっていく。そして、周囲に対しても信頼を受けて、受容されているという感じを持つのです。そうすると、課題に対して前向きに取り組む、意欲的な構えが持てるのです。

そしてここで、適切な課題です。その子がちょっと頑張ればできる課題を与える。それにちゃんと意欲的に取り組んで達成する。そうしたら、こういう循環が回っていくと、いくら障害特性があっても、少しずついい方向に動くのです。

でも、逆に、悪い、あまり望ましくない循環があります。周囲が否定的な叱責をする、体罰を加える。そうすると、どうしても自分の評価は低いです。周囲に対しての不信感や、自分だけ、いつもしかられて被害感を持ちます。そうすると、前向きになりませんし、どうせ自分なんかという自暴自棄的、抑うつ的な気分になってしまう。どうせ、自分なんか最後までできない、ということで、課題には向かえない。そうすると結局、障害特性からくる適応的でない行動がくりかえされて、またしかられるというふうな悪循環です。こう

いうふうになってしまうと、なかなか抜け出せない。それで二次障害になっていくのです。

負のループがそのまま子どもにとっての不適切な養育や虐待につながる。そのなかで、いろんな状態が出てきて、ちょっとずつ問題行動が出てきてしまう。

二次的な症状や問題などをきちっと、どうしてこんなことが起きているかのということ、正しく察知し、正しく見極める、気付く。そうしないと、次に、問題が持ち越されて新たな問題が生じると思うのです。これは、鑑別所でみているから、思うのです。やはり、どうしてこういうことが起きているか。表面だけを見ては駄目なのです。何が起きているかということ、全体として、やはり理解する。

でも、案外、こういうメッセージ症状があるから、問題の所在が理解されます。子どもというのは言葉を言ってくれませんからね。子どもってもちろん、1歳半から言葉を獲得して何でも言えるのですが、内面的な言語というのはないですから、いろいろな負のループの過去を持って、こういうことが悲しいとか、こういうことをしていきたいな、そんなことを大人のように言えないですから、その代わりに身体の症状を出したり、行動化、いろんなことをしたり、それから二次的の症状を起したりというふうな症状があるわけですね。その症状を見て、子ども理解を楽にしていく構図の鍵になるわけですね。

その気付きにつながれば、こういう症状をなるべく早く出してくれたことで、一歩変える、全体の環境を変えようということになれば、私は症状というのは、必ずしも悪いものだと思っていないです。「少年法」は、そういう理念があるのです。「少年法」というのは、20歳にならないまでの子どもで、だからやり直しがきく段階だと思っている。そういうふうな視点で「少年法」があるわけですね。

とにかく、循環というのを変えること。こ

の循環は流れですから、流れというのは、力になります。川も地形を変えていくようなことです。

望ましいかたちの循環に変換することができれば、すべてがそんなに肩の力を入れなくても、相互的に、循環的に、良いほうに変わっていくという例が多くあるのです。周囲のほう、親や先生のほうも、案外楽で、明るい気持ちで過ごせるといって、何かこう、いいところ見つけて、褒めていけばいいわけなので、いつもしかってばかりで、つらいですよ、しかるほうも。

子どもが救われれば、親も救われる。先生もそうなのですけれども。やはり、私は子どもさんと、親御さんのほうもカルテをつくって、診察をしている例はたくさんあります。親御さんなりに気持ちがよくなる、表情がすごく明るくなってくださるのは、やはり子どもさんがよくなることなわけです。子どもがよくなると、親御さんが楽になるでしょ。親御さんが楽になって、表情が明るくなって笑顔が浮かべてくれると、子どもは救われるのです。

そういう本当に相即的というか、相互的なものかなと、いつも臨床していて思います。

負のループから正のループへ変えることが肝心と言いました。変えるにはどうしたらいいか。やはり、知ることだと思えるのです。子どもを正しく「知る」。子どもの示す適応的でない行動や症状は、どうして出ているんだという理由を知るのです。正しく「知る」。

知ったら、子どもに対する見方や受け取り方が変わってくるのです。感情が変わる。おのずと、態度や対応が示されます。

これはもう時間がないのでいきますけど、こういうふうに、親側も先生もそうですけれど、人間ですから、神様じゃないですから、循環の中で成長もしますし、落ち込みもします。

こういうふうに、なかなか自分が生んだ子

どもをかわいいと思えないし、親としての自信を持ってないのです。そうすると、子どもの顔を見るのがしんどい、膝に来られると嫌だ。また、しつけが悪化してしまうということで、これは負のループなのです。

でも、意味がわかります。あ、そうだったんだ、こういう診断があって、この子、好きでやっているんじゃないくて、こういうところが弱かったんだ、特性があったんだという診断がわかります。そうすると、親も楽になるのです。あ、だから、これだけ注意してもあかんかったんだ。こういうことがあるということは、この先、いろんなことが起こって、こういうふうにして、こういうふうにして支援していけば、こういうようになるというふうなことが想像できるのです。示されれば、まず見通しがつくのです。もう、この先、どうなるんだろうと言っていたのが、ある程度の見通しがつく。

とすると、自分のせいだけじゃなかったんだと思って、お母さんも少し自信を取り戻してくれるかもしれません。子どもに対してもですね、この子は困った子だと言って、被害者のように、この子は困ったと思っていたんだけど、一番困っていたのは、実はこの子だったんだ。いつもしかられて、一番困っていたのはこの子だったんだということで、いじらしく思えたり、かわいく思えたりということがよくあります。

そうすると、お母さんでも変化します。おまけに、ちゃんとした専門的な対応方法、しつけ方法がわかると、必ず子どもは改善するのです、長く続けば。

支援者の立場からいくと、やはり効果的な介入は、正しい理解、診断につながるような正しい理解をすることです。やはり、正しく知ることは、ちゃんと愛することにつながります。愛情だけじゃなくて、正しく知っていなかったら、どうしたらよいのか実はわからないのです。

だから、愛情だけを押しつけること、そういうことをしたら、やはり辛いと思います。親だって、愛情が足りないとか言われても、じゃ、どうしたらいいの。愛情は、いい言葉ですけども、抽象的な言葉で、どうしたらいいの。親に対して行動する具体的なことを言ってあげないといけないのです。こういうことだから、こうしたい。

やはり親も人間ですから、その成長を循環的な方法で。なかなかしばらく結果が見えないときに、傍にいてということ。ちょっとでも良い兆候が出てきたら、共に喜ぶこと。支援者が、学校の先生とか、支援者が横にいたら、お母さんは本当に勇気が出るものです。そういうものなのです。

特に、思春期、青年期です、いろいろな問題があるのは。特にこの時期は。

それは、やはりそれまでに周囲の誤解、それから適切でなかった対応が積み重なっている。問題が理解されないままに、主にストレスが蓄積されているということで、二次障害になると思います。

その時点では、かなり引きずっていることがあるのです。現実場面で失敗体験が積み重なっています。特に、自閉傾向がある人は体験時にいろんなこう、何で自分に悪気はないのにしかられるんだろう、みんなにいじめられるんだろうということがたくさん経験されています。過去の嫌な記憶から、なかなか抜け出せない。それは、視覚的な記憶なのです。いじめられたときの光景がそのままにフラッシュバック、何十年経っても、ばあっと出てくるのです。

この視覚的な記憶というのは、本当に生々しいですから、物事による記憶とか、出来事による記憶にしていたら、だんだん色あせるものです。記憶って。昔いじめられた。でも、だんだん時間が経ったら、セピア色になり、ほろ苦いくらいの意味になるんだけど、視覚的に記憶している場合は、総天然色でよみ

がえるので、そのときの気持ち、感情というのが、そのまま引きずり出されています。だから、しんどいのです。

だからこそ、本当に集団の中で安心して過ごし、いやな思い出を作らないことが大切なのです。配慮が必要ということです。

ソーシャルコミュニケーションがつかないということがありますから、すぐ対人関係のトラブルを起こしやすいわけです。だから、傷つき体験ばかりが重なる。その経験として、こういうことがなければ、対人関係って、どうしてもうまくいく場合もあれば、うまくいかない場合も多いのです。だから、対人関係、人によって、人は必ず、一番傷つきます。でも、人によって、必ず、一番癒されるのです。それを体験しながら、人を知っていく、社会を知っていくという過程があるのですが、どうしても、対人スキルがつかないために、傷つき体験だけがたまってしまうということです。放っておいたらです。支援しなかったらです。

他者や社会との良好な関わりが乏しいのです。否定的な経験ばかりをしている子が多くて、しかも固執性が強いために、被害感が続くということになるわけです。本当にしんどい。

思春期、青年期になりますと、抱えている問題です。このころ、自分のことを見つめるようになる時期です。自己像というね。劣等感を感じたり、今までの失敗経験から自分を責めるとか、自分は駄目だというふうなことで悩んだりします。こういうことでずっとこう、日々、悩んでいます。

それから、自分の居場所がないのです。自分がいていい場所、みんなが僕のことを知っていてくれて、歓迎してくれる場所。そういう、居場所がないということは、本当につらいのです。周囲の人々や社会とのあいだに大きな距離を感じている。

ということで、その上で青年期における新

たな課題があるのです。進路、就職です。友だち関係、異性関係に向かわなければいけないわけですから。深刻な不適應感を抱える。

こういうことで不適應です。引きこもり、職場の問題です。大学までは、まあまあです。少なからずいいんだけど、職場に入ってから、臨機応変にすることができなくて、不適應になってしまう場合もあります。

それから、精神科的な問題になるときもあります。抑うつなどの気分障害です。それから、ADHDも結構多いと思いますけれども、発達障害をもっている方のうつが、とても多いのです。

それから、強迫性障害。強迫ということは、もともとこだわりやすいので、持っているというのはあるのですが、それが思春期になって、急に、ものすごい強迫の症状が出てきたりします。

やはり発達障害の診断をして、支援するというのをなくして解決はしないです。

それから、社会不安障害（対人恐怖）というの、多いのです。それからパニックになったときに、精神障害と間違われてしまうような場合もあるわけです。それから、いろんな問題、違法行為とか性的問題ということが起こっています。

これは、今度は発達障害の場合、もともと枠に構える、枠に従う構えが強いんです。まじめです。むしろ、赤信号を誰もとおっていないときにぱっと渡るといって行為とか、それから50キロ制限とか、高速道路の80キロ制限なんて、びゅんびゅんみんな、そこは当然のように走っていますけれども、あれは絶対にかたくなにやっちはいけないんだと思うとか、そういう人がいますから、決して小さな犯罪ということになると、全然、違う。

だけれど、ただ大きい、犯罪、非行がたまに起きます。動機が不可解なことがあると思うのです。ちょっと目立つような大事件になったりして目立つから、新聞で取り上げら

れたりしてしまうのです。

いくつもの原因が重なっているのです。発達障害がそのまま、ストレートに非行につながることはあり得ないです。まあ、自分の行動が他人の影響を理解できないということです。それから、他人の表情や周囲の状況が読みとれない。

それから、悪性のこだわり行動が伴う。それから、他の人に利用されやすい点もあるのです。何の悪気もないのに、共犯になったりすることがあります。やはり、友だちが欲しいというのがあります。友だちになってあげたら、ちょっとお金を持ってきてとか、万引きしてとか、そういうふうに反応しておいて、言われて、そのままそういうことをして、共犯にされたことがあります。

それから、被害的な認知をしてしまうということがあります。それから、蓄積するのです。発散されないままで、ずっと蓄積されていく。それから環境が変化したり、職場の配置転換があったり、困難に直面したときなど、柔軟に対応できないものですから、混乱したり、パニックになって、特に大きな問題があることもあります。

次に、自閉症圏の中で、非行化しやすい、リスクもあるかどうかです。これはやはり、あると思うのです。

いくつかありますが、まず男子であることです。当初の犯罪非行は、男の子のほうが圧倒的に多いです。大人になっても、男性のほうが、だいたい9対1とか、10対1の割合で犯罪非行はこういうふうに男性のものなのです。言ったらね。女子であるということは、それが、普通は非行にいかない。

それから、やはり虐待的な家庭環境、あるいは母親的な機能の欠如。本人の代わりに臨機応変にいろいろ状況を察して、根回しをするとか、まったく、そんな機能があることで、社会的状況でとても大きいと思います。自閉症の場合はやはり、難しい。

それから、学校での不適応。これも大きいです。いじめや孤立で登校拒否とか、エスケープの場合も、どちらもです。

それから、学校以外でも居場所がない。未診断で相応の支援・配慮を受けていない。対人スキルが未発達。それから、こだわりがあります。こだわりがある場合。それから対人恐怖があったり、抑うつ、強迫というふうな精神科的な症状があると、その苦痛がより拍車を掛ける場合があります。

広汎性発達障害と非行のまとめですけれども、発達障害だけが非行の原因ではありません。さまざまな原因が重なって、逸脱したりします。でもやはり、認知のゆがみは、被害的に認知したり、あれはよくないから正してあげないといけない。そういうふうな思い込みがあるのです。これはどうしても、何ともしがたいというのがあるので、これの修正がこまめにあってほしいと思います。週に1回、診察に行って、よくないと思うかと言うから、それはやめなさい、それはやめておきなさいというふうなことがあります。

やはり、なるべく早い時期に診断する。それは特性が周囲に理解されることが望ましいです。早い時期から、配慮と支援のなかでスキルを獲得していくことがやはり望ましいです。この本人のストレスが少ないですし、それから社会参加の方にいきやすいですし、そういうわざわざ非行にしないといけないような状況にならないように、なりにくいのです。

それから、本人は、なるべく和やかな人間関係のなかで、平和的なモデルを見ながら育つことが望ましい。これも大事です。

それとか、よく例としては、DV家庭のなかで育つ。どうしても、DV家庭で育ってしまった場合、DVを受けて、苦痛を感じて苦しんでいる母親に共感して、暴力は絶対に振るわないという、本当にそういう価値観を持つ男の子がいますが、あるいは暴力を振るって、人間関係のパターンをつくっている、何

でも支配している父親のほうに同一化して、この暴力を使えば、うまくやれると父親的に同一してしまう場合があるのです。

どうしても、広汎性発達障害を持っている子となると、そういう複雑な人間関係の機微がわからない。お母さんがDVを受けているのに、そのわりには、ちゃんにご飯をつくってくれるとか、べつにいいんだ、苦しくないんだ。でも、お母さんがいる事情なんでしょう。経済的に別れるわけにはいかないんだ、あるいは世間体があるから、別れたらあかんとか、この子が私学の学校に入るから別れたらあかんとか、いろんな理由があるのです。でも、そういうところもわからないから、あ、お母さん、べつに暴力的にされてもいいんだということで、あ、こういう暴力が人間関係の基本に思ってしまうやすいので、やはりDVのある家庭があれば、早く別居したほうが、絶対うまくいきます。

行動改善の重層的な性質です。環境調整をすることが、すごく大事です。絶対に大事です。家庭に理解してもらおう。学校や職場で理解と支援を求める。年齢相応の居場所も大事です。

それから、発達を促進するというとき、環境をどこにするかといいますけれども、それから薬物も必要ないですから、症状を抑える。一日、一日、症状がない日を重ねることがすごく大事です。

これら全部が相互に関連して、効果的につなぎ合わせ、総合的に全体として、行動を改善していくということです。あと1個です。

違法行為が起こったときに、どういうふうに対処して、予防していくか。小さなサインを必ず子どもは示します。いくら言いなり型の人といたって、その前にサインを示さなきゃ小さな存在。そういうときは、背景にある苦しさ、生きづらさの存在を想定して、本人の言葉に、しっかり耳を傾けること。焦ることはないです。自分のしんどさや生きづら

さをわかってくれる人がいるだけで、本当に支えになれます。

それから、その生きづらさを受け止める、今度はこちらが用意します。無理をしない、無理をしたら駄目だというふうに告げることです。じゃあ、どうしよう。学校での不適応をどうしよう。じゃあ、ちょっと保健室でお話をして、保健室のところに逃げ場をつくらうか。仕事がうまくいかないとか、これはちょっと向いていない仕事だから、上司に言って職場の仕事内容を変えてもらおうとかみたいと一緒に考えるので、それがストレスの強い状況からは、我慢させては駄目です。早めに対処する。それから、抑うつとか不安のような状態になったら、早めに治療する。

それともう一つ。違法行為をしてしまうでしょう。ちゃんと大目に見ない。やはり、事の重大さとか、相手に与えたダメージの大きさというのはどうしても想像できにくいので、やはりちゃんと同じように厳しく処分を、厳正に処分をしてもらうことで、重大なんだということを認識させないといけません。

予防、抑止のためにできることは、何よりも早期診断されることに越したことがないです。早い時期に状況を知って、周囲が正しい理解をし、適切な支援をしていくことに尽きるのです。

適応的な行動が取れるように、日常の中では、ソーシャル・スキル・トレーニングを積んでいくことです。

それから、社会的な行動に必要な基本的なルールを早い時期から一貫して教える。小さいからいいだろう、大きくなったら、だんだんとするだろうじゃいけないのです。9歳か10歳の子どもに、なんかやらないだろうとって、こんなことしたり、触りにいく癖となる。やはり、よくない。それは犯罪になってしまいます。10歳はかわいいんだけど、そういうことがおこなわれます。

それから、早期からコントロール。年齢に

応じた居場所を持つことです。家庭や社会の中で役割意識です。人との良好なつながりが持つ。これも特に大切です。これがあると、非行にいかないです。良好なつながり。やはり、非行をすると、お母さんも悲しむとか、先生とか、周りの人を悲しませるみたいな、自分がいなかったら、学校、家も困るとか、そういう役割意識を持つことが、逸脱的な行動をすることがあっても、非行を抑止します。

家族です。これは非常に大切です。家族は日常的なサポートシステムをつくってくれる最も大切な人たち。でも家族もまた、いろいろ苦労が存在していると、抑うつとか、パニック症状とか、ストレスからの症状が出る場合もあります。だから、一緒に治療とかをする場合もあるのです。やはり、こちらが配慮すること。ちょっと親御さんを、家族を自分一人じゃない。毎日、元気で明るく暮らしていくと、必ず、子どもさんにとってもプラスになりますから。

親族にも発達障害の特徴がある場合があります。そうすると、家族全体を包括的に理解し、多角的にサポート。学校だけではなくて、発達障害支援センターとか、児童相談所とか、そういう、より多角的なサポートが必要になっていきます。

まとめです。早期の診断についてです。障害特性が理解されていれば、将来予測される、思春期にはどういうリスクがあるとか、ということがわかるわけですから、診断を下すことが、結局、予防的に、保護的に、対応することができる。

でも、かといって、学童期ではなくて、診断されることが思春期に、ちょっと非行で診断されるということも実際あるのですが、やはり、どの時点でもです。診断することによって、その時点から、本人の特性です。正しく理解する。こういった悪気が特にないな、こういう特性があるんだな、こういう

特性があるから、ああ、本当にこういうふう生きにくいよねということを周りが思いやることができれば、その時点から、その人に対する適切な配慮と支援が可能になってくるのです。だから、今日より遅い日はないというかね。

二次障害の予防、二次障害からの回復ということですが、やはり、発達障害の正しい理解と支援によってこそ、可能になります。この正しい理解なくしては、あり得ません。駄目です。

支援の連続性を保たせること。絶えず、適応水準を維持するように努めること。小学校から中学校とか、すべての高校とか、学校を経て、就労するときに、やはり連続性を持たせる人の存在です。結局、学校が大切だけでも、やはり担任が替わったり、その当たりが、がくっと落ちる場合があります。だから、これがあります。

その行為というのは、まず診断があります。やはり診断があると、他の機関がちゃんと動いてくれるわけです。この人は、問題だけなんですというだけでは、何ら支援はできない。やはり、きちっとした診断があってこそ、次の医療機関とか、つながっていきます。

ということで、ちょうど時間になりましたので、早口でしたけれど、話を終わらせていただきます。（拍手）

（了）

（注）

上記は、2010年11月13日（土）に、追手門学院大学において開催された、地域支援心理研究センター公開シンポジウム「発達障害の理解と支援—診断を支援に結びつけるために—」の基調講演を基に作成した。